

基本的考え方

公園には、子どもたちだけではなく、ベビーカーを押す母親、高齢者、障害のある人等、多様な利用者が訪れる。公園を訪れる目的は、散歩や休養、運動、自然とのふれあい、人々との交流など様々であるが、多くの人々が一定の時間を過ごす場所として「心地よさ」が求められている。

公園の配置にあたっては、周辺のまちづくり計画との連携を十分に行い、子どもや高齢者、障害のある人等、すべての人が利用しやすい条件を満たすことが重要である。また、公園の計画・設計にあたっては、あらゆる利用者にとって安全で快適な施設となるように配慮し、積極的に「心地よさ」を享受できる創意工夫が凝らされることが望ましい。

今後は、参加型の計画プロセスを取り入れることが求められており、これによって公園が人々により一層快適な場所となることが期待できる。さらに、草花や水、野鳥等の自然に直接触れる、風や木々の音を聞く、土や花の匂いを嗅ぐといった五感で楽しめる施設づくりを行うなど、楽しく魅力ある空間を提供していくことも重要である。

なお、公園は、設置される場所（自然地、丘陵地）や利用形態（庭園等）によって、その規模や構造は様々であることから、すべての公園等に画一的な基準を適用することが困難な場合もあると考えられる。その場合は、様々な身体特性の人々にとって「心地よい」空間をつくるという基本的な考え方を土台として、計画地の特徴を十分に生かしながら、できる限り基準の意図を反映した整備を行うものとする。

設計のポイント

1 施設内での連続性、各施設へのアクセス

出入口は、あらゆる利用者が安全に利用できる形態で、わかりやすく利用しやすい位置に配置し、通行に支障のない園路に接続させる。園路は、幅員・勾配・溝蓋等に配慮し、車いす等で公園内を周遊できる連続した動線を一経路以上設ける。

公園内の主な施設（便所、水飲み器、案内表示、ベンチ、野外卓等）は、高齢者や子ども、障害のある人が接近しやすい位置に配置し、利用しやすい構造とする。特に、アプローチの段差や勾配、進入スペース等に配慮する。

公園の主要な入口には案内板を設け、あらゆる身体特性の人々が容易に通行できるルートを分かりやすく表示する。園内の案内板、手すり、視覚障害者誘導用ブロック等によって、各施設の場所やアクセス方法を分かりやすく情報提供する。

2 計画プロセス

公園の整備にあたっては、計画段階で利用が想定される様々な人が関わり、参加型で計画・設計を進めることによって、問題点の検討や情報蓄積を行うことが重要である。そのためには、公園の計画を行うための開かれた参加の場を設定し、事業者、利用者、専門家（設計者）等が協働で公園をつくりあげる関係づくりのプロセスを構築することが不可欠である。利用者が主体性を持って計画・設計に携わることによって、公園に対する愛着も深まり、整備後も公園の管理や園内での活動に関わるなど、利用者が育む公園づくりが期待できる。

3 五感で楽しむ創意あふれるデザイン

公園内の施設は、トイレや水飲み場等を除き、利用方法を固定されるものよりも、利用者の工夫によって様々な広がりを持たせることが望ましい。

車いすの目線から楽しめる景観、触ったり匂いを嗅いだりできる花壇コーナー、材質の異なる舗装材の使用等、視覚のみならず、聴覚、嗅覚、味覚、触覚という五感で楽しめる創意あふれる空間を積極的につくり、あらゆる人々にとって「心地よい」公園を目指すことが、より高いレベルのバリアフリーデザインを追求することとなる。

